

対策への取り組みに関する協定が締結された。今後も情報共有、協力体制を定めていくなかで、積極的に取り組んでいきたいと考えている。

地域とダムに関わりとしては、長野市もダムを観光資源としていきたい考えである。ダム湖における花火大会やカヌーを活用した事業の実施、ダム湖に映える新緑や紅葉の美しい景色の発信など、ダム管理所と連携してダムの魅力をアピールしたいと思う。

## ■ダムのまち・大町として、ダムの価値を伝え、水資源を守り活かす — 大町市長 牛越 徹 氏

平成18年7月の豪雨は、私が市長職に就いて3日後のことだった。経過を振り返ってみると、洪水という危機的な非常事態の中で、冷静に組織的に対応できていたのだと思う。当時、市の中心部は雨が降っていたが、大町ダムや上流の発電ダムによる特例的な操作により下流域を洪水から守ってくれていた。犀川の沿川である八坂地区の災害が心配であり、大町消防団に協力を得て警戒態勢を進めた。犀川の水位が上がってきたことを受け、災害本部を設置し、高齢者の多い八坂地区に対して夜半に避難することは危険であるため、夜8時頃有線放送により、避難勧告、避難命令を出す可能性があることを伝え、早期の避難準備を促した。洪水はきちんと危機意識をもって冷静に取り組めば、ある程度減災できると感じている。また、特例的操作によって流域は守られた。このことが、これからのダムの運用方法にもつながっていくとありがたいと思う。



大町市は、ダムを資源として認識している。ひとつは「観光」資源。ダム周辺での紅葉、春先のタムシバの開花は大変美しく、大勢の方が訪れる。もうひとつは「水」資源である。大町市には4つのダムを造る基地としても賑わった歴史がある。

また、市内を流れる農業用水を活かし、7年前に市直営の水力発電所をつくり、自然の落差を使って発電し100戸ほどの電力を供給している。まんべんなく水を使っている一方で、高瀬川で起きる「瀬切れ」に対しては、大町ダムからの放流により、河川環境を保護する役割も担っていただいている。これからの大町ダムに期待することは、洪水調節機能を果たすために再編計画をしっかりと進め、早期に工事着手していただきたいということである。

## ■平成18年7月豪雨時の特例的操作と大町ダム等再編事業の概要

### — 北陸地方整備局 千曲川河川事務所長 堤 達也 氏

長野県のほぼ北半分を占める千曲川流域は、千曲川河川事務所と長野県で管理している。平成18年7月の豪雨では、北アルプスを中心に梅雨前線が大雨をもたらし、大町ダム周辺や梓川のダム周辺など、多いところで総雨量は400mmを超えた。また、長野市よりさらに下流にある立ヶ花水位観測所で、あと少しで計画高水位に達するという観測史上2番目となる水位を記録した。



このとき、高瀬川上流の東京電力HDの発電ダムを含む3つのダムでは、特例的に水を溜めこみ、通常操作で放流される約2割の放流量に抑えた。同じように梓川にある3つのダムでも放流量が抑えられた。この特例的操作と水防団の活動により、下流域の氾濫をなんとか免れたという状況だった。

大町ダム等再編事業は、東京電力HDの発電ダムである七倉ダム、高瀬ダムの発電容量の一部を洪水調節容量として国が買い取るもの。あわせて、高瀬ダムは周辺の花崗岩質の山々からの土砂流入が多いことから、ダム湖に流入した土砂を大町ダムの下流まで搬出するというもの。これにより、通常のルールとして洪水の管理ができ、下流域の安全を守れるようになる。